共著者の三方は、本書の刊行に至る約一〇年間での、『対遇表現』研究会を継続させ、対遇表現を包括的にとらえる枠組み、さまざまな対遇表現の分類や記述について、先行研究を含んだ研究会を組織した。その成果は学会誌や文集を含む出版され、対遇表現の他に『対遇表現』という言語学上の体系化がなされる。各研究者は、対遇表現に関する研究を深め、様々な視点から対遇表現の特性を明らかにすることが可能になった。

言語の体系的な記述においては、個人差の差に大きく依存する傾向がある。このことから、各研究者が独自の視点で対遇表現の特質を明らかにすることにより、対遇表現の理解が深まることが期待される。本书は、この観点から対遇表現の特性を明らかにすることを目指している。
「言葉」が「言葉」に、「解釈」が「解釈」を、という形で、「言葉」や「解釈」を相互に参照して、一つの構造を形成している。これにより、「言葉」と「解釈」の関係が明確に示され、読者に理解を促す効果がある。
行動展開表現の基本的枠組みに基づいて分類的に記述されている。『表現主体』が『表現意図』を叶えるための表現上の『一とまとまり』として定義される『文話』を、自己表出現。理解解説表現、行動展開表現、の三種に大別し、特にそのうち『行
動展開表現』が「人間関係」の認識に基づく表現である。それを出発点にしたものをある16頁。例えば「すみません。水を一杯いただけますか。」「あの…。もしよろしけたら、この本を
借りしてよろしいでしょうか。」などの表現を、行動展開表現という表現を『行
動展開表現』と密接な関わりを持つ『文話』であるという認識をもって行
動展開表現と表現を含める『読話展開への視野』の存在であった。例えば学生が相
手教官に留学用推薦状を作成を依頼する際、文話の解説として、切
り出し、依頼の可能性確認、相手の反応確認、会話の経過を説明して
用件という『読話展開』を含む前に存在する概念によって分類的に記述して
いる（140 142頁）。ひとくちに不依頼の読話という読話行動で
ある。総ての単位的な発話の組み合わせにより丁寧に簡略
にも実現されるという日常生活の姿を、単に個人の敬語形式の選
択だけでなく、より大きなサインの言語表現のまとまり『文
話』がつつき出るものとして生き生きと記述されているのであ
る。敬語研究に該当する視点を導入した共感的な発話として特
筆したい。さかのぼって、敬語表現、敬語表現という概念の有
効性に由来する貢献だと著者は考える。